〔農業全書二五穀〕畠稲（又旱稲共、又ゐなかにては野稲とも云、）

畠稲の種子も色々あり、土地所の考して、利分のまされるを作るべし、粳あり糯あり、其中に占城（ちやんぱん）稲と云は、糯にて米白く、その粒甚ふとく、穂の長さ一尺餘もありて、其から大きに高くして葦のごとし、是畠稲の名物なり、土地にあひたる所にては、おほく作りて過分の利潤を見るべし、凡旱（ひでり）稲を作る地は、水田にしては水乏しく、又畠にして濕氣ありて、兩樣ともに宜しからざる地に是をうゆれば、水稲にも勝れて實ある物なり、肥たる地は尤よし、大かたの土地にても、濕氣ありて、少深く和らかなる地に宜し、糞のしかけ手入、取分ほどらひある物なり、心を盡して作るべし、苗地の事、冬よりくはしくこなし、雪霜にあはせてさらし置たるに、熟糞をうちをきて、籾を水に浸す事、三日にして取あげ、日にあて口の少ひらくを見て、灰ごゑを用ひて、横筋を少深くきり、麥の蒔足（まきあし）ほどに、むらなくまき、土をおほふ事も麥に同じ、若地かはきたらば、うすき水ごゑをそゝぎて、土をおほふべし、猶相つゞきて旱せば、其後も度々水をそゝぐべし、苗二三寸にもなりたる時、畦のたかき所をふみ付べし、但うるほひある時はふみ付べからず、同じく種子を蒔時分の事、二月半より四月まではくるしからず、さて移しうゆる事、甚肥たる地を好むにもあらず、荒しをきたるを、秋より度々耕し、細かにこなしをきて、苗の長さ七八寸なるを待て、がんぎを少ふかく切て、灰ごゑを以て、葱をうゆるごとく、一科に三四本、磽地ならば四五本づゝうゆべし、かぶ殊の外ふとる物なれば、肥地ならば、かたのごとく薄くうゆべし、中うち芸り培ふ事、麥とかはる事なし、中うちの度ごとに色を見て、よく熟したる糞水をうすくしてかくべし、總じて甘味のつよき物なるゆへ、濃糞又はあたらしくつよき糞をば、必用ゆべからず、虫氣する物なり、唐にて毎度旱損する國に、此旱稲のたねを、他國より求め來りて作りてより後、飢饉のうれへを助りたりと、農書に記せり、是占城稲のたねと見えたり、何れの村里にも、田には水乏しく、畠にしては濕氣ありて、